

「県民と県議会との意見交換会」 一関会場 の概要

〔日 時〕 平成29年 8月24日（木） 13：00～15：00

〔場 所〕 一関工業高等専門学校 管理・教育棟 1階共通会議室

〔話題例〕 「次代を担うものづくり人材の育成と地域の活性化について」

〔参加者〕 （6名）

立 野 嵩 陽（一関工業高等専門学校 機械工学科 5年）

榊 原 優 太（一関工業高等専門学校 機械工学科 4年）

西 川 航 史（一関工業高等専門学校 機械工学科 3年）

佐 藤 凌 雅（一関工業高等専門学校 電気情報工学科 3年）

菊 池 祐 美（一関工業高等専門学校 電気情報工学科 2年）

千 葉 優（一関工業高等専門学校 制御情報工学科 2年）

〔出席議員〕 （8名）

名須川晋議員、千葉進議員、神崎浩之議員、川村伸浩議員、飯澤匡議員、
工藤誠議員、高田一郎議員、小西和子議員

〔事務局職員〕（7名）

◆ 参加者自己紹介及び若者向け傍聴促進ポスターの感想

○立野さん

これからいろいろな意見を2時間ほど話し合わせていただくが、我々も遠慮なく意見を述べさせていたきたいと考えているので、どうかお答えいただければと思う。私は機械工学やものづくりに興味があり入学した。将来的には、もちろん岩手もそうだが、日本や世界を見据えて、世界を飛び回るような仕事をしたいと考えている。出身は奥州市水沢区である。

○榊原さん

一関高専で学生会副会長を務めている。出身は一関市萩荘である。私の将来の夢は宇宙に行きたいと思っている。一関からは出てしまうが、世界を出て宇宙に行きたいと考え必死に勉強している。

ポスターについての感想は、県議会は若い人というか学生は興味がない人が多いと思うが、ポスターを見るとアニメの写真が載っており、若者も興味があると思う。こういったものを取り入れていくのは素晴らしいと思う。

○西川さん

出身は盛岡市の北松園である。私は宇宙や鉄道関係に興味がありこの学校を選んだが、今はそちらに手が回らないほどいろいろありすぎて、将来のことはまだ考えられていない。岩手に就職というのは今のところ考えていないが、ゆくゆくはこっちに戻ってきたいという思いは少しある。今日はいろいろと意見を交換させていただき勉強したいと思う。

ポスターの感想については、県議会や市議会を傍聴したことがなく、ニュースで少し見る程度だが、こういったクリーンなイメージが伝われば、若者の県議会に対するきっかけになるのではないかと思う。

○佐藤さん

私が高専に入学したきっかけは、小学校の時に見ていた高専ロボコンが好きで将来取り組んでみたいと思ったことである。今年もロボコンの部活で東北大会に臨もうと思っている。私は将来ロボット関係の職に就きたいと思っており、地元就職も視野に入れて考えている。もっとロボットを開発する企業が増えればよいと思っている。

ポスターについての感想は、私は県議会を見たことがなく、夕方にきょうの県議会を3分見る程度であり詳しくないが、こういったポスターがきっかけで若者が県議会に少しでも興味を持つ機会が増えればよいと思う。出身は北上市である。

○菊池さん

出身は盛岡市の都南である。私がこの学校に入学したきっかけは、両親が共にこの学校の出身であり、父親がナビの地図をつくる仕事をしているのをみて、自分もものづくりに携わりたいと思い入学した。まだ将来のことは決めていないが、今日の意見交換会で何か将来のことを考えるきっかけになればよいと思う。

○千葉さん

出身は一関市の花泉である。私が高専に入学したきっかけは、将来的に障がい者のためのものづくりをしたいと思ったことである。

ポスターに関しては、県議会をしている場所には行ったことがあるが、実際に県議会をしているところは見たことがないので、こういったポスターがあれば行ってみようかと思う。

◆ 学校紹介

○立野さん

岩手県議会議員の皆様、ようこそ一関高専へお出でくださいました。活発な意見交換をさせていただければと思う。お手元に学校紹介のパンフレットをお配りしたが、これは、一般の方への学校紹介や来年度に入学を考えている中学校に配っているものを本日は皆さまにもお渡ししている。この内容に沿って説明させていただく。

高専は中学校卒業後、5年間の一貫教育により、高度で実践的な専門技術者を養成する学校で全国に57校ある。高校と短大と同じ期間で4年生大学並みの専門知識と技術が身に付けられる学校である。なお、高専は学校教育法第115条に定める高等教育機関であり、高校と短大の一貫教育校ではない。私も母に高専について説明しているが、一般的には高校の延長線上と捉える方が多い。あくまでも高専は高専という高等教育機関であり、高専は高専というくりである。呼び方も生徒ではなく学生と呼ぶ。卒業者には準学士と大学3年時への編入資格が与えられる。私は来年度より新潟県の長岡技術科学大学へ進学する予定である。

○榊原さん

一般的に高校の延長線上といわれる理由があり、1年生から3年生は一般科目が多く、高校と同じような学習をする。そこから4年生と5年生には専門科目が多くなり、工学系の勉強をしていく学校である。

高専の就職率は100パーセントである。1人に20社くらいの求人があり倍率は25倍～30倍となる。

学科が今年度から変更となった。昨年度までは機械工学科など学科が4つあったが、今年度から1つの学科で4つの系という形態になった。今までは入学時に学科を4つの中から決めなくてはならず、入学してから自分に合わないということがあった。今年度からは、1年生の時に全員

共通の教育を受け、2年生に進級する時点で自分に合った分野を4つの中から選んで進むということに変更となった。

高専は部活動も行って約30の部活がある。中でも機械技術部がロボットコンテストで有名であり、高専のロボコンの全国大会にも毎年出場している強豪校である。他に自動車部、電子計算機部、技術総合研究同好会など、ものづくりに関した部活がある。

年間の行事として、入学式、卒業式、校内体育大会がある。他の高校にはあまりないのが工場見学であり、修学旅行のように工場に行ってみ学をしている。また、高専祭を実施しており、10月末から11月の土日に開催している。2日間で2000人ももの来場者があった年や、テレビの生中継がきて盛り上がった年もある。

○立野さん

高専は大学と同様に国際交流も盛んであり、3年次から留学生の編入枠がある。マレーシア、インドネシア、モンゴル、ラオス、タイなど、東アジア中心の国から来ている。また、フランス、タイから短期留学生を受け入れており、私の所属している研究室ではタイからの留学生を受け入れている。

オーストラリアやニュージーランド、韓国等へ海外研修の実績もある。右の写真は私がオーストラリアで撮ってきた写真で、私も3年次にオーストラリアのワガワガという、シドニーから東京と盛岡くらいの距離がある町へ海外研修に行った。

高専では遠方からの通学が困難な学生のために学生寮を完備している。北は軽米町から来ている学生もいる。全国にいろいろな高専があり、それぞれ特色があることから、私のクラスには茨城から来ている学生もいる。そういう学生のために学生寮が完備されている。

進学と就職に関しては、近年は5対5くらいの比率になっている。以前は7対3で就職が多かったが、今は進学が増えてきている。就職先としては大手からマニアックな中小企業まであるが、自分で選べるのが大きいと思う。文系の方だと履歴書を100社送って1社とれるかとれないかという話を聞くが、高専の場合は大体1社か2社に出せば決まる場合が多い。そのため、求人倍率が1倍を超えたというニュースを聞くと、やっと1倍かと思ってしまう。

学生会では学生行事の全てを運営している。行事運営については、下部組織として、校内体育大会実行委員会と、先ほど説明した高専祭実行委員会が組織されている。また学校行事、部活動に係る予算すべてを学生が運営している。これは他の高専でもなかなかない例であり、一関高専の学生会のレベルは東北地方の中でもずば抜けて高く、全国的にみてもレベルが高いと自負している。

高専のメリットは専門的な勉強がいくらでもできることである。先生に聞けば何でも答えてくれるし、大学同様に博士号をもっている先生方がたくさんいらっしゃるの、専門的な学習をやると思えばいくらでもできるし、高い技術力を身に付けることができる。

また、学生活動が盛んであり、技術系の部活動では5年前にロボコンの大会で優勝している。自動車部に関しては、昨年学生フォーミュラ大会に出場しEV部門総合優勝している。電子計算機部のプログラミングコンテストに関しても上位に入賞している。私が立ち上げた技術総合研究同好会は、電車をつくる活動をしており、非常に技術的な部活動だと思っている。

基本的には自由であり、学生のやる気次第ではいろいろなことができる。先ほど説明したように部活を立ち上げることや、さまざまなコンテストに出ることも可能である。やる気次第でいろいろなことができるメリットがあるし、学生次第では最高の環境だと思っている。

高専のデメリットは異常な男女比である。看護等だと女性が多く、工学だと男性が多いというイメージが浸透してしまっており、学科を選ぶときも機械工学を女性の方が選ぶということのためらったりすることもある。工学は人類の営みを支えてきたもので、工学というものに男女関係

なく入っていけばよいと思う。

また、コミュニケーション能力が意外と低い。私を見てもあまりコミュニケーション能力が低いというのは説得力がないかもしれないが、低いと思う。

留年する可能性が高校や大学に比べて高く、高校に比べると留年する確率が30倍という学校もある。あとは毎日私服を選ぶのが面倒だということがある。

高専という制度や、一関高専という学校はとてもいい学校であると思っていただきたいし、日本や岩手を支える人材をこれからも輩出し続けていくのが一関高専だと思っている。

◆ 意見交換

○名須川座長

大変わかりやすくまとめていただいた。今回は一関高専の学生から質問や意見などを用意していただいております、まずそれぞれご発言をいただいて、それらについて意見交換をさせていただきたい。その後、議員側からも質問や意見などがあればお受けすることで進めてまいります。

○立野さん

まず、こちらであらかじめ準備した質問について説明させていただきたい。

○榎原さん

一関高専に入る学生は岩手県の中学校から来ている方が多いが、岩手県の中学校の99%が部活全員加入制であることについての意見、質問をさせていただく。部活は本来生徒の自主的な参加により行われるものだと思っているが、岩手県の中学校は99パーセント強制で部活を行っている。他の県を調べた結果、強制となっている学校は99パーセントより低く、多くても半分の学校となっている。

中学校で部活を強制させることにより、学力の面で劣ってしまうのではないかと考えている。全国学力テストランキングがあり、小学生6年生と中学生3年生で全国共通のテストを行うが、中学校の順位が小学校の順位に比べて毎年落ちている現状である。数学に関して小学校の順位は18位、33位、19位だが、中学校に入り42位、45位と下から3番目とかになっている。なぜ、3年間で一気に落ちるのか考えた時に、部活が一つの原因ではないかと思う。

それが改善されることにより、岩手県の中学生の学力が少しずつ上がり、ものづくりの人材の育成と地元就職に関係してくるのではないかと思う。岩手県に住んでいる人がみんな都会に行くわけではなく、地元就職する人もおり、全員の学力が少しずつあがることで地元就職するときによいことがあると思う。

○小西議員

私も皆さんと同じ考えである。私は商工文教委員会という常任委員会に所属している。中学校の部活の参加について質問したところ、他の東北各県より明らかに岩手県は加入率が高い状況であり、考えていかなければならないと思う。優勝旗を何本とったという競争になっており、部活の過熱によってさまざまな弊害が起きていることから、改善すべきだという意見を申し述べている。土日でも部活や練習試合があり、生徒の自由な時間を奪っているし、教職員も家族と過ごす時間がほとんどなく、改善することが大事だと思う。

小学校での割とゆったりとした生活から、中学校では、朝練や昼練、放課後、土日といきなりハードな生活になることで不登校になる生徒もおり、大きくメスをいれなければならないと訴えている。

県教育委員会では、第2第4日曜日を休むよう、また、週に1度部活の休みをとるように通知

している。

学力についてもそのとおりだと思う。数学や理科の先生が不足していて、免許の無い他の教科の先生が代わりに教えるということもあり、免許を持った先生を採用するということも話をしている。

○千葉議員

高校の立場から話をすると、中学校の部活動に関しては高校入試がネックになっている。高校入試の時に、部活は何をしていたか記載する欄があり、面接でも必ず聞いている。部活をしていないことにより見方が変わってしまう。部活推薦入学もあり、中学校の部活全員加入となる原因は高校入試だと思っている。

学力の部分には得手不得手があり、ただ単に点数だけが学力ではないと思う。一喜一憂する必要もなく、それぞれが人としてどう成長しているかをみるのが本来の評価だと思う。点数やランキングだけでというのはあまり信用していない。その時のテストと同じような勉強した学校は点数が高くてものものであり、それで一喜一憂することもなく、それぞれ地道に勉強も部活も成長していけばと考える。

○名須川座長

あと4つほどあるので、次の質問に移らせていただく。

○佐藤さん

ロボコンを通じた地域貢献について、提案と皆さんの意見をお聞きしたい。ロボット製作に関して、機械の設計や電気工作、プログラミング、材料系の知識が必要不可欠となっている。ゆくゆくは小学校のプログラミングへの必修化も話題にあがっており、工業国の日本においては、子どもにもものづくりに興味を持ってもらうことが大切だと思う。その過程の中で、ロボット製作やロボットに関する展示会等を行えば子どもにも興味を持ってもらえるし、次世代を工業で担っていく人たちを少しでも増やすことができるのではないかと思う。

他県の高専もこのような活動を行っており、奈良高専や宇部高専、秋田高専など、全国大会に参加したロボットの実演や展示、また、ロボットの製作に関する講習や電気工作の講座なども行っている。このようなイベント等を県と協力して実施していけばよいと思うが、皆様のご意見をお聞きしたい。

○名須川座長

非常に興味深い意見であるが、どなたか発言される議員の方はいるか。

○飯澤議員

今までクラブ等で小学生対象のイベントに関してアクションを起こしたことはあるか。

○佐藤さん

一度実績があり、昨年、全国大会に参加したロボットを盛岡で行われたサイエンスシンポジウムに出させていただいたが、好感触であったことから、もっと広めていきたいと思う。

○飯澤議員

開催したときの感触は大変良いという話だが、さらに広めていきたいということから、開催した際に何か大きなハードル等は感じたか。

○佐藤さん

人が集まらないといけないので盛岡市での開催となってしまう。遠方になるとロボットの運搬等にお金がかかるので、そういった問題が解決できればいいと思う。

○飯澤議員

技術力を売らないとこの国は生きていけないことは間違いない。高専が技術力を高めてノウハウを持っているということはこの地域で周知されている。一関市役所や教育委員会に対してアクションを起こしたり、働きかけをしたりしてもいいと思う。やっているうちに問題点が出てくると思う。

○千葉議員

高専は高専だけ、高校は高校だけでロボットの大会を実施しているのか。

○佐藤さん

高専だけの大会である。高校は高校で行っていて別の大会になる。

○千葉議員

例えば、岩手において高専と高校と一緒に実施するという発想は今まで出たことがあるか。

○佐藤さん

その点の議論はしたことがなかった。

○千葉議員

新聞で大きく扱うこともあり、私が勤務していた千厩高校でも文化祭でのロボットは多くの方が見に来る。そこに飛び入りで一緒にやるといった発想は出たことはないか。

○佐藤さん

話がなかったというのと、そういったイベントがどこで行われているというのもあまり情報が入ってこなかった。

○千葉議員

近くに一関工業高校もあることだし、地域の工業高校との連携があればいいと思う。

○立野さん

私は電車をつくる活動をしており、乗用鉄道模型という5インチゲージのものをつくっている。遊園地やイベントにあるような、線路幅が127mmでその上を跨いで乗るものをつくっており、2年生に立ち上げ3年生に完成させて今も取り組んでいる。

先ほどアクションを起こせばいいという話があったが、アクションは起こしている。市役所や県に電話をして、いわてサイエンスシンポジウムにも出て、いろいろなところに名刺を配っているが、我々のアクションには限界がある。県内においては他にもいろいろな活動があると思う。学生主体やアマチュアの活動といったものを県等がバックアップするシステムを整えていただけないと、一関高専にこういうのがあるのね、ハイハイで終わってしまう。岩手県は広いので遠方からの移動となるとお金がかかってしまい難しいと思うが、そういったものを一堂に会して岩手工業見本市のようなものを推進しても良いのではないかと思う。東京だと幕張メッセ等でやっている。

○飯澤議員

大変貴重な意見だと思う。技術系の今後のあり方について、どれだけ理解がある人が行政職にいるかということが重要。将来を見通せば技術力を次の世代につなげていかなければならないので、行政も、高専ですかハイハイといった対応ではいけないと思うし、そのために今日の意見交換会有り、私たちも勉強させていただきたいと思う。

県議会としてできることもあるが、みずから動くというのが一番大事だと思う。例えば、よい行政職の人と巡り会い、その中で理解を求めて広げていくなど、皆さんがいろいろな方と接することで広がっていくということが大事である。とにかくやり続けるということが大事だと思う。

○神崎議員

市役所や県と一緒に組んでやればよい。市の小中学校は一関市立なので、市と小中学校の関係は敷居が低い。高等学校は県立なので、市より県庁と情報交換をする。高専は国立なので、市や県は接点を持ちにくいところがある。高専のロボットと一緒にやりたい気持ちがありながらも滞っている感じがある。世界で有名なロボコンの一関高専が地元にあるのだから、私たちも市に対して働きかけていく。

小学校の子どもたちは機械が好きで興味があるし、市民の発明クラブのようなものもある。世界に誇る一関高専のロボットがあるのだから、一緒に接点をとりながら、市民、県民の皆さんと勉強したり一緒にやったりと子どもたちにつながることをしていきたいと思う。

○名須川座長

3つめをお願いしたい。

○立野さん

先ほどの話と重複するが、学生や若い人達が何かやりたいときにバックアップしてくれる県の政策やシステムがあるのかお聞かせ願いたい。例えば、留学に関しては、トビタテ！留学JAPANという取り組みがある。

今は高専にいてものをつくっているが、いざ自分が就職した後を考えると、学生や若い人たちが、働きながら、学びながら何かをつくって広げたいと思ったときに、ものをつくりやすい環境があれば良いと思う。これが工業的な意識の向上につながってくると思う。

○飯澤議員

産業と学校と行政で産学官の連携が行われているが、ネットワークがある一定の割合でおさまっている。先ほど神崎議員も言ったが、高専は国立という部分で地元の行政との枠に入りにくい。

学生へのいろいろな活動の支援について、アメリカでは企業のための人材育成というのも含めて産学官に企業が入りこんでいる。わが国ではそこまで進んでおらず、直接的な補助金は難しいのがこれまでの形態。今後、人材育成は貴重な日本の財産であり、検討していかなければならない。

○立野さん

日本で産学官を完璧に完成させているところはなかなか無いと思うので、だからこそ飛びぬけないとこれからが大変であると思う。隣の宮城県が完成させたあかつきには岩手は難しくなる。

国立ではあるが、同じ県民であり、同じ市民であり、同じ国民である。敷居を上手く打ち壊していかないといけないが、国がやろうとすると全部見ないといけないし、市は市を越えてやることは難しいと思うので、県が主導していただき、環境を整えていただきたい。

○飯澤議員

はっきり言って行政の自己満足に終わっている部分はある。長いスパンで人を育てるということを考えることがあるべき姿だが、なかなかそこに至っていないという点は反省すべき点で、これからの大きな課題と思っている。

○名須川座長

まだ1時間あるので、そういった施策があるのか事務局で調べられるか。

○神崎議員

補助金をどこに出すのかということがあり、例えば学校、先生、サークル、部活、個人に出すといったようにいろいろな補助の仕方がある。岩手県や市町村で、学生の個人に出すことをどのように組み立てられるのかと今考えていた。補助金は皆さんの税金であり、補助金を出すことにより、どうやって県民、市民に還元になるのか、そういう組み立てを考えていた。どんどん勉強したい方々が羽ばたいていける環境ができればいいと思う。

牛の話だが、肉牛の大会がある。例えば巖美の牛農家をやっている方などが出品するが、その中に2つの県立農業高校が出品している。農業高校の牛が大人の大会に出品しており、おそらく、県から農業高校に補助金を出しているのではないかと思う。農業で出しているとした場合の仕組みがあれば、ものづくり工業と言っている岩手県なので、工業にもできる可能性はあるのではないかと思った。

○立野さん

確かに補助金なので払いっぱなしではなく、県や国に還元できないとだめだと思う。例えば企業に出せば法人税を払って還元できるが、学生は還元の課題が残るため難しいとは思いますが。

○名須川座長

次に4つ目の質問をお願いします。

○立野さん

昨年は国民体育大会と全国障害者スポーツ大会が開催されたが、私もバレーボールの審判の資格をもっており東山総合体育館で大会の補助をした。

国体による実際の効果はあったと思う。問題は、バレーボール協会や行政、そして県民それぞれが培ってきたノウハウがあると思うが、せっかく国体を成功させたので、その経験を次の47年後の国体まで燃え尽きることなく、燃やし続けなければいけないということだと思う。何に生かせるか考えをお聞きしたいと思う。

○工藤議員

岩手県では4月から新たに文化スポーツ部を立ち上げた。国体を契機として培われた県民のスポーツに関することや、文化の部分で国体を支え成功させた。そういった文化スポーツの力を一つの部署に集め、地域振興に資していくということで部を設置した。文化、スポーツの振興課、ラグビーワールドカップ2019釜石大会の推進課もあり、東京オリンピックのホストタウンについても動いている。

よく言われている国体のレガシーを大切にしていき、47年後まで続くかわからないが、スポーツでも文化の面でも県政の中心テーマとして、県民の皆さんの力を出していく場面として、一生懸命頑張るといって設置した。障がい者スポーツの関係も文化スポーツ部に一元化をした。

○川村議員

昨年、国体と障がい者スポーツ大会をいろいろな立場で応援やお手伝いをさせていただいたと思う。

これからどうしていくかということだが、競技者として、国体を目指して技術的なレベルや競技のレベルを上げるのが目標の一つ。国体を開催して、競技する方だけではなく、運営する、また、地域でもてなすという一体感が岩手県民にとって大切だったと思う。

前回の国体の時、私はまだ中学生だった。その時代で国体をやったという意識はあり、そういう気持ちが延々と残っていると思う。金額や成果という数字で表せるものだけではなく、国体と障がい者大会をやってよかったと思うこと、10年後、20年後に岩手の国体に関わったという気持ちが残ってくることも一つの成果と思う。単純に結果ということだけではなく、そういった目線も大切にしてほしい。

○高田議員

昨年行われたいわて国体は、東日本大震災があり、全国から寄せられた支援への感謝の気持ちを込めたいわて国体だった。当初開催するとき、被災を受けた状況の中、岩手でたくさんのお金をかけてやる必要があるのか、岩手を会場にすることがよいかどうかとの議論があったが、結果として昨年のいわて国体は大成功であり、開会式は非常に感動した。東日本大震災は全国からの支援が無ければここまで復興はできていなかった。東日本大震災からの復興中でも素晴らしい国体ができたと伝えることができ、全国の皆さんへの感謝の気持ちを込めた大会だった。

そしてスポーツの力は大きく、思想、信条、いろいろな考えを乗り越えて、心ひとつになって頑張り、心身の発達ともに感動を呼ぶのがスポーツの力だったと思う。これは面々と続けていくべきだと思う。そういった成果、価値は大きな意味があり、ただ単に経済的效果もあったと思うが、それとは別な大きな価値、財産を残した大会であった。

○名須川座長

全国障害者スポーツ大会の話をしていただくと、岩手県は障がい者に対するスポーツの取り組みは皆無に等しかった。これまで福祉分野にあったが、文化スポーツ部を設置し、障がい者の方のスポーツにも力をいれることとなった。岩手県障がい者スポーツ協会も立ち上がり、力をいれていこうとなり、いい効果があらわれるのではないかなと思う。

千葉さんも福祉に力をいれるためにこの学校を選択したということだが、パラリンピックでの車椅子、スキーに出る選手などには本格的な装具が必要である。そういった分野で高専の力を発揮して、岩手から全国や世界で活躍してくれる選手の装具部分のお手伝いもしていただけるような状況になればありがたいと思う。

それでは5つ目の質問をお願いします。

○立野さん

事前に準備した最後の質問となる。これはかなり騒がれている課題だと思うが、少子高齢化人口対策の問題である。

一関市に移住しようという内容の市の広報ビデオがある。野山に囲まれ、東京から新幹線で2時間といった内容だが、東京から2時間の範囲に自治体はたくさんあり、森に囲まれているのはどこの地方自治体も同じである。一関市の工業課にも言っているが、県の皆さんにもお願いしたいと思うが、他の地方自治体に比べて岩手はこうだともっと打ち出していくべきだと思う。自然が豊かというのはいいことで、森に囲まれ野山に囲まれて農業ができるということもいいことだが、それだけではなく、他の自治体よりも一歩抜け出ることが必要だと思う。そういった意味で岩手はこうだというような岩手ブランドの強化が必要。いまの感じだと岩手と言ったら岩手はどこ、何があるの、

と言う人もいると思う。何もない状況で岩手に住みたいとはならないと思う。どこかのブログで書いていたが、岩手は住みたいまちランキングで47位となっている。岩手を他の自治体との競争に勝てるようにするべき。

Uターン、Jターン、Iターンについてだが、岩手で学んで岩手で働くという地元定着ももちろん大切だが、例えば岩手で学んで一度東京などに出て吸収し、吸収したものを岩手に持ち帰ることが必要になると思うが、どのようにお考えか伺いたい。これは他の自治体も悩んでいる問題だと思う。

○飯澤議員

戦後の昭和20年ごろは郡部の方の人口が多かった。なぜかという食料のことがあり、明治維新以降人口を増やしていったときには、食料を求めて開墾できる箇所を開発して人口を増やしていった。いま何が起きているかという、そこは一世代や二世代でおわり、戦後工業化が進み人材は金の卵として中央に吸い上げられ、そのまま定住している。

歴史的に考えると、そこで地方に呼び戻すという手を国策として打たなかった。今日の人口減とともに世界的に都市化で都市に人が集まる傾向がある。これは情報や便利さ、雇用を求めて集まっており、日本だけでなく全世界的課題である。これを解決するのは難しい問題であり、日本の国としてのありようとしても、本来であれば30年くらい前に腰を据えて対策しなければならなかったが放置してきた。

言えるのは、やれることをやるしかない。岩手県レベルで宮城県レベルでという考え方をするが、東北レベルで人口を維持できるかということを考えなければならない。立野さんが言ったように、一回東京方面に技術の習得や新しい技術を求めていき、こちらに戻ってくることを考えるのが一番現実的である。

私は10年前から国際リニアコライダーの実現について活動している。ものづくりの基盤を科学技術特区で実現すると、多くの知的な集団や国立的な研究機関がくる。I L Cは最初から民間との技術の提携を目標にしている。セルソンの研究所がジュネーブにあり、ヒッグス粒子を研究している場所は民間との提携はしておらず基礎科学だけだが、I L Cについては最初からそうなっている。実現すれば、一旦東京に行っても戻ってきて、こちらに張り付く企業に就職し、ふるさとで生活できる基盤になると思う。I L Cが全てではないが、全体として人の流れを戻す工夫をしなければいけない。

アメリカがしていることが全てよいとは言わないが、アメリカは州が一つの国のようになっている。有名な企業が州に税金を払い利益を還元している。今は東京一極集中で全ての企業の本社が東京都に税金を納めている状況。大企業の地方分散も促していかないといけないし、情報も全世界どこいっても均等にインターネットで入手できるので、新しく会社を興し、地方にベンチャーもできるように取り組んでいかななくてはならない。

人材をどうやってつくるかが大事で、一関高専にはこれからも注目していきたいし、頑張っていたきたいと思う。

○高田議員

一関市のPR動画は問題があるという発言があったが、仙台でもPR動画がいろいろ話題になった。みんなで知恵、意見を出し合うことがいいと思う。一関市に意見を述べて改善して欲しいといったように。そういう中で知恵を出し合って住民の批判や意見に耳を傾け、良い動画をつくっていくべきと思う。

例えば立野さんは一関に暮らしてみたい一関の魅力は何と思うか。

○立野さん

私の出身は奥州市だが、奥州市よりはよいと思う。タイからきた留学生が研究室にいるが、一関の見どころは何かと言われたときには、案内するところが室根山しかなく、室根山に車で登って景色がよいということしかできなかった。すぐに思いつくものはないが、魅力的なものは人によってまちまちだと思う。これはかなりの問題だと思う。

○高田議員

私も都会に7年ほど暮らした後、人生のほとんどは一関である。自分の生まれたまちにずっと住んでいると、地域の魅力や価値はなかなか発見できない。例えば都会の人が来たとき、いろいろな一関の魅力や価値の話がされ、そんな素晴らしいことがあったのかという新しい発見があったりする。都市と市民、住民との地域間交流をどんどん行い、そして私たちも発信するが、受け入れた人たちからもいろいろな一関の素晴らしい価値や魅力を発信してもらうような努力が必要だと思う。

問題は地方創生。お互いにどこの自治体でも努力をしているが綱引きになるだけの話で、なぜ地方に人口が集まらないのかということだ。日本の経済政策、産業政策を見ても東京一極集中である。一関の基幹産業は農業であるが、皆さんのお父さんやお爺さんの時代はそれで生計をたてられたが、現在は農業だけではやっていけない。産業が衰退していることや賃金の格差が都市と農村にあるといった構造的な問題にメスをいれていかななくては解決しないと思う。政治の分野と地方自治体の努力の両面で対応しなくてはならないと感じている。

○名須川座長

あと30分程度なので自由な意見交換としたいと思う。

○榊原さん

私は宇宙に興味があり、I L Cの話聞いたのが中学校3年生の時だった。一関市の中学生が集まって茨城県のJ A X Aに行くというイベントに参加した。一関にI L Cがきたらいいことがいっぱいあると聞いてから4年経った。I L Cが難しいという感じになっているが、何がだめなのか。一関にもってこられない理由は何か。お金もあると思うが。もしかしたら私たちにもできることがあるかもしれないので聞いてみたい。

○飯澤議員

リニアコライダー・コラボレーションという、加速器を設計し、これからの将来を運営するL C Cと呼ばれる国際的な科学研究者の組織がある。今のセルンの円形加速器の将来設計やI L C、そして先のクリックという新しい直線加速器をこの先どうするかということを経段的に研究し、大型加速器の装置として想定し動いている。I L Cは素粒子をぶつける新しい分野の直線加速器で、この分野については技術的にはもう96パーセントくらい確立しており、いつでも準備段階にできる。実現の可能性の大きな問題はイニシャルコストがかかりすぎるのが第1点。話を前に戻すが、全世界的に日本でやってほしいということ。アメリカも最初やったが、アメリカの研究者も信用がなく全世界的にだめで、欧州はセルンをやっているので予算がない。日本は宇宙工学や基礎物理学の研究者も多くノーベル賞をたくさん持っており、ぜひ日本でやってほしいということで、L C Cが決定した世界唯一の候補地が北上高地である。九州との綱引きもあったが九州に戻ることはまずない。最終的には日本政府が手を上げるかという瀬戸際にある。日本政府がこの1、2年にやらなければ可能性は低く、L C CがI L Cをとばして別の加速器にチェンジする可能性もある。

昨年、盛岡で開かれた国際的な会議において、イニシャルコストを抑えるためにどうするかを考え、当初は30キロメートルだったものを20キロメートルにしてもヒックス粒子を発見し次の研究課

題をクリアできるかを検討し、技術的に可能だということが確認され、正式には8月に中国で開催された会議で承認された。当初、1兆円かかるのが6000億円できるということである。これは日本政府への最後通牒。鈴木厚人岩手県立大学学長も、これをクリアしなければ日本という選択肢は外されるということを日本の政府にも言っている。

何がだめなのかは政治的な駆け引きもある。文科省も森友、加計問題で混乱しており、なかなか人材を配置できない。アメリカもトランプ政権になり主要たるポストも辞めたりしている。I L Cに関する人も決まらず前に進まないが、研究者の方々は努力して前に進めようとしている。最終的には鈴木厚人先生が、来年の8月末までに決めないと、今の研究者達の動きをみるとI L Cはとばす可能性もあることを先日アナウンスした。一関市長もその情報を掴んでいるが、あと1、2年で決定しなければならないということは間違いないと思う。あとは政府が決定できるかどうか。6000億円というイニシャルコスト以上に波及効果があり、試算では4兆円強となっていることから大丈夫だと思うのだが、東北にということに引っかかる人がいるようである。そういったことをクリアしていかななくてはならない。

間違いなく、つくばを凌駕する科学技術特区になるので、そうした場合に、自分達は何ができるか考えて欲しい。宇宙工学に進みたい人はつくばのKEKにも深く関わっていくと思う。まず興味をもって知識を正しく理解して膨らませて欲しい。

○榊原さん

素朴な質問だが6000億円というのは、国的、県の、世界的にみればどういった規模なのか。

○飯澤議員

岩手県の一般会計が復興関係は別にして約6000億円。岩手県の県政を維持するために、年間で約6000億円が必要である。国のレベルで考えると、投資という意味では無駄にならないと思う。建設費用もあることから国債を発行して、何年かに分けてだすというのも可能である。額に驚くというより、世界で初めての研究機関なので、国の構え自体がうまくいっていないと思う。

○菊池さん

私は中学生の時に、いわて希望塾という岩手県内の各校から2、3人の中学生が集まって岩手の未来について話し合う2泊3日の会に参加した。

その際に一人一人が自分の地域のよい点と課題点を持ち合い、グループごとに政策を考えるという取り組みがあった。達増知事の話聞き、グループの仲間と話し合いを行ったうえで、マスコットキャラクターを考えたり、岩手が日本一の生産量を誇るワカメなど海産物を使った丼を考えたりするグループがあった。中学生はいろいろ自分達で思っていることがあり、中学生同士で話し合うと新しいことが生まれると思う。私たちより年下の人たちとこういった会議があってもいいのかと思った。

○西川さん

先日、つくばで行われたサイエンスシンポジウムに参加し講義を受けてきた。会議の規模も大きく、講師も大企業の方や成功している方であり有意義な時間だった。

岩手県に目を向けると、中学生や子どもたちに対して、ものづくりに関する機会が増えれば良いと思う。実際にものづくりに触れてみる機会や工場見学等を設けてみれば興味がある人がたくさんいると思う。小中学生のできるだけ進路がまだわからなく、選択肢が多い時期に実施していただきたい。

○工藤議員

この前、県立の工業高校に行って校長先生の話聞いた。高校生の皆さんが、工業系理系の仕組みを中学生に見せるなどして、工業高校ではこういったことをしているという話をしているが、中学生に実施してももう遅いということだった。小学生のころから、電気や機械について学べる高校や高専があるということをお教え、興味をもってもらい、人材を育成するべきではないのかと思う。

○立野さん

大人になると忙しくてそんなこと考えてられない人と、大人になったからこのままでいい、変えられないと思う人がいると思う。議員の皆さんのように岩手を変えたいと思う人もいるが、世の中の大多数の人は現状でなんとかしたいと思っている。小中学生達は素直であるし、表面に出てこないが何らかの不満を抱えており、変えたいということをお若いうちから持たせてあげたい。

現在の小中学校教育では底辺に合わせすぎていると思う。下を救っていかうという感じだが、私は上を伸ばしていかないと技術力や工業的に日本は勝てないと思う。これからは上を引っ張り上げることが必要だと思う。小学校から上を伸ばしていくことを取り組むべきだと思う。お若いうちから問題意識をもたせるために、いわて希望塾のような取り組みを年1回ではなく、もっと活発に行うべきだと思う。

○千葉さん

先ほどのILCの話だが、ILCが岩手に本当にきたらそれに関する企業も岩手に移動してきて、岩手の新しい魅力になると思う。しかし、ILCとはいったい何かというと素粒子等の難しい話になり、県内も県外もそうだが、もっとわかりやすく学べる機会が少なすぎると思う。日本にILCがくるためには一般の人がILCとはどういったものなのか、くることによるメリットがわかりにくい部分があるので、小学生等にもわかりやすく説明する機会がほしいと思う。

○佐藤さん

個人的な話だが、昨年、超人スポーツプロジェクトという、今までにないスポーツを科学技術で創造していくというプロジェクトに参加した。今まであったものを学ぶだけではなく、岩手の中で新しいものをつくり上げていく仕組みが必要だと感じた。講義にきてくださった先生も、東京大学、慶應義塾大学等のレベルの高い大学からきてもらった。博士号を持っている先生方や活躍されている先生方とコミュニケーションをとれる機会が必要だと思う。

○西川さん

今日参加できなかった三浦が前から言っていたが、彼はいろいろなことにチャレンジする人で、今日も会社にインターンに行っており来られなかったが、各方面にチャレンジしている。

彼が言っているのは、ベンチャーで岩手に貢献し新しいものをつくりたいが、岩手にベンチャーの場が少ないと聞いた。IターンUターンで帰ってくるが一定期間就業させないと奨学金があげられないことや、雇用が少ないので都市に人がいく。新しいベンチャー企業を岩手に招いて雇用をつくれれば若者も活性化し、今までにない角度から岩手を盛り上げられるのではないかと彼は言っていた。

私は岩手に将来いるかわからないが、大きな企業の方が技術もあり、経験も積み、そこで技術や技能を身に付けた人が岩手に戻り、ベンチャーを起こすのはいい機会だと思う。チャンスがあればあらたに活性化される。岩手出身ではなくてもしたいと思う人がいたら援助し、受け皿をつくるべきと考える。

○立野さん

付け加えると、例えば、ベンチャーを立ち上げたい、何かしたいと思う人はやりやすい環境を探す。いまのところそれがない。いま最初に始めればそっちに人は流れていくと思う。例えば私が33歳で東京で働いているとし、ベンチャーを始めたいと考えた場合、まずはネットで情報を探す。もし岩手県でそれに補助するという仕組みがあれば応募すると思う。そのように人の流れをつくっていかなければならないと考える。ベンチャーを立ち上げ県がバックアップし成功すれば一つの会社ができる。そこに雇用が中小企業だったら100人200人が集まり、100人200人の家族が集まり、税収がアップし法人税も入ることでウィンウィンの関係を築ける。行政は1年1年で予算が区切られており1年のうちに全消化するという考えになるが、10年20年の長いスパンで考えなくてはならないと思う。法律等の関係でうまくいかないこともあるかもしれないが、辛抱強く掛けあうしかないと思う。

○神崎議員

この近くに清明支援学校の広大な跡地があるが、何かできないのかと思う。例えば、1回皆さん方が一関を出て行ったとして、ベンチャーや研究機関、研究所、研究室群があれば戻ってきやすいと思う。私が今日一番感じているのが、一関市も県もそうだが、一関高専に対して敷居が高く、入りにくかったと思っている。なかなか国立の高専には行きづらいところがあるが、高専という宝があるので突破しなくてはいけないと思う。

一関も県南技研をつくり産学官を高専とやりたいというのがあった。県立では県立大の周辺に同じようなものつくっていききたいという話があった。市でも県でも高専の皆さんとの接点を持ちえないでいたということがわかった。皆さんはせつかく5年間一関にいたわけだし、皆さんが戻ってきてベンチャーや企業、研究機関など、どんなかたちでも戻ってきてもらうように整備すればいいと思う。私も高専祭やスイミングしか行く機会がなく接点をもちえなかった。今日は若い人と話したが、もっと若い人と話したほうがいいという意見もありびっくりした。今後もよろしく願いたい。

○立野さん

県と国の敷居を低くするにはどうすればよいか。2時間話し合い、敷居と皆さん言っているが、敷居を消し去るには何をすればいいのか。鉄道模型を走らせるためにいろいろな人に名刺を配ってきた。事務にもかけあってきて、あそこは市だから、県だからと言われる。ここまで言って敷居だなどと言われると何もできない。市などは地元就職して欲しいと言ってくるが、今の状況だと敷居が意識されており、取り除くところから始めないといけない。例えば、高専の学生が小学校に行って体験授業することや学生間の交流など行い、うまく歯車がかみ合ってきたら、清明支援学校の跡地を利用して、高専の別施設、I L Cと一緒にした施設を高専や県、市でつくることができると思う。敷居を取り除いてほしい。私はこの学校はあと1年で終わりになるが、これから将来戻ってくるかもしれない。もしかしたら高専の教師になっているかもしれない。これからいろいろやりたいことがある人が増えてくると思う。そういう人たちのために敷居を取り除くということをもっと考えてほしい。せつかく岩手に国がつくった施設があるので利用しない手はないと思う。私も協力できることはなんでもしたいと思う。県議会議員は県民の代表の方々なのでそういったことをしていただければうれしいと思う。

○名須川座長

皆さんの思いは今日参加した議員も十分に理解したと思う。今後、議会の場で提案、提言をしていくものと思う。もう少しお待ちいただければと思う。

○立野さん

今年にという話ではないので、5年後とか、またはI L Cの決定と同時くらいにできればよいと思う。皆さんの名簿はここにあるので監視させていただきたいと思う。

○名須川座長

そろそろ終わりの時間ですので、何か言い足りなかった人がいらっしゃれば。

○飯澤議員

今日来た議員はこの現状がよくわかった。皆さんのできる範囲の中で応援団をつくることだと思う。先ほど話があったとおり、中学生にインスパイアする機会が少ないと感じた。I L Cの講演会を通じて、研究者の方々の貪欲な知識欲とか応用をどのようにするかを吉岡先生を通じて非常に思ったし、そういった技術も東北にはたくさんあると知った。高専というシステムは日本の経済発展に非常にうまくできたシステムだと思う。それが企業戦士となり技術力を高めた歴史、経過もあるので、今日をよい機会と捉え、私たちも皆さん方と頑張っていきたいと思う。

○名須川座長

先ほどの学生等の補助金の有無についての質問に対し、村上議事調査課総括課長より答弁をお願いします。

○村上議事調査課総括課長

学生あるいは個人の方がものづくりをする活動に対し、直接補助金を出すという制度は現状ない。補助金を出すという形ではないが、個人のものづくりを支援したり、メーカームーブメントみたいなものを後押しするためのものづくりメーカー塾を開催することや、あるいは場の提供ということでパブリックスペースを設置することを今年度始める。今は簡単な資料しかないのですが、詳しい資料をご希望があればお届けする。

◆ 閉会

○名須川座長

一関選出の議員も4人来ており、そこを窓口にしてもよいかと思う。県の機関もあるのでそちらにお問い合わせいただいてもよいかと思う。

それでは、予定の時間となったので、意見交換はここまでとさせていただきます。若い皆さんの日ごろの考え方などを十分把握させていただいた。これからの議会活動に十分に参考にさせていただく。

冒頭にも申し上げたが、本日いただいたご意見、ご提言については県議会の全議員が情報共有し、今後の議会活動にいかしていく。これからも県議会に対するご意見やご提言があれば、地元の県議会議員あるいは県議会事務局までお寄せいただきたい。

本日はお忙しいところご参加いただき誠にありがとうございました。以上を持ちまして意見交換会を終了させていただきます。ありがとうございました。

